The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	＜書評＞ Edward S. Reed, The Necssity of Experience, New Haven and London : Yale University Press, 1996
Author(s)	佐古, 仁志
Citation	年報人間科学. 2005, 26, p. 303-307
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/25887
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

◇書　評◇

Edward S. Reed, The Necessity of Experience, New Haven and London: Yale University Press, 1996

佐古仁志

I

本書は、アフォーダンスを提唱したことで知られる生態心理学の創始者J・J・ギブソンの後継者ともくされながら、わずか四十二歳という若さでこの世を去ったE・S・リードの三部作の第二作目である。

著者はその学問的な出発点を進化認識論から始めた。その後、哲学、心理学、進化論と幅広い分野にわたって論文を書いているが、その中でも彼の名を有名にしたのは、レベッカ・ジョーンズとともに編集したギブソンの論文集『直接知覚論の根拠』(1)と、ギブソンの伝記の体裁をとりながらその心理学史上の位置づけを行なった『ジェームズ・J・ギブソンと知覚の心理学』という二冊の書物であった。これらは大変優れたものではあったが、その評価はあくまでもギブソン研究者としてのものであり、必ずしも生態心理学者としての著者自身の評価につながるものではなかった。その著者が、生態心理学者として、その独自な思想を様々な分野の人々に強い印象を与えることになったのは、一九九六年から一九九七年にかけて出版された、『アフォーダンスの心理学』(2)、本書『経験の必要性』、そして『魂から心へ』(3)の三部作によるものであった。

第一作目である『アフォーダンスの心理学』の前半部では、ギブソン的観点から心理学を記述しなおすと共に、そこに進化論的アプローチ(4)を加えることによって、ギブソン的生態心理学からリー

ド的生態心理学とでもいうべき新たな生態心理学を展開している。また、その後半部では、様々な発達心理学的研究の成果を取り入れながら、ヒトがいかにして人間になっていくのかを、リード的生態心理学の観点から論じている。第三作目である『魂から心へ』では、現代の科学的心理学が成立した事情を説いている。著者によれば、必ずしも明確に身体と分けることのできない豊かな内容をもつ魂(soul)という概念が、身体と明確に区別される貧しい心（mind）という概念へと変容されることによって、科学的心理学は初めて成立可能になったのである。この本では同時に現代の心理学にかわる新たな心理学も模索されている。

以上に本書の前後をなす二つの著作について簡単に述べた。さて、第二作目にあたる本書では、現代社会における様々なメディアの発達（特にテレコミュニケーションの発達）によって、現代社会における人間の経験がいかに変容したかが主題として議論される。すなわち、著者は、メディアの発達が直接体験によって得られたもの（一次的経験）を間接的なもの（二次的経験）によって囲い込んだこと、その結果、以前は豊かであった私たちの日常生活がいかに空虚なものにされつつあるかということを主張する。著者は、こうした傾向がデカルト以来の心と身体とを明確に区別することができるという反-経験主義的哲学の伝統と共に生じてきたこと、そしてこの枠組みにとってかわるものとしてプラグマティズムの哲学（特にデューイの哲学）が重要であることを強調する。評者として留意したいのは、過程(process)を強調することだけでその内容が乏しいと批判されることの多いデューイの哲学に対して、著者が、生態心理学的アプローチによりこれを実践面から補強し、本書の目指す「経験の民主化」への道を模索している点である。

本書のキーコンセプトを、一次的経験（primary experience）と二次的経験（secondary experience）に求めることができるだろう。一次的経験とは、自分で見たり聞いたりする経験、つまり他者によって媒介されていない直接的な（direct, first-hand）経験であり、二次的経験とは同じ世界を生きる他者によって媒介された間接的（indirect, second-hand）経験である。そしてこの二種類の経験には三つの特徴がある。第一に、二次的経験は必ず一次的経験を含むこと、第二に、一次的経験は自律的な情報探索を必ず含んでいるが二次的経験はそのような探索を含むとは限らないこと、最後に、一次的経験では情報の探索を制限するものは何もないのに対して二次的経験は他者によって必然的に制限されておりその探索には限界があること、という点である。

II

本書は、プロローグ“A Plea for Experience”とエピローグ“Fighting for Experience”を除く、七章から構成されている。以下各章ごとに簡潔にその内容をみていくことにする。

第一章“Have You Ever Been Experienced? Philosophy Meets the Real World”では、伝統的哲学や科学的心理学が、一次的経験を重

視するものに「素朴実在論者」というラベルを貼り付け「経験」を蔑視してきたことを述べると同時に、「経験」を擁護するプラグマティズムの哲学を取りあげ、具体的には哲学者ローティとパトナムについて検討している。

第二章 "The Search for a Philosophy of Experience" では、第一章であまり触れられていなかったローティについて、「表象」を強調する西洋哲学の伝統を批判した点で彼を評価しつつも、彼の提唱する「リベラルユートピア」として実現される消極的自由についてはこれを退ける。

一方、著者によれば、プラグマティズムの提唱者の一人であったデューイは一次的経験それ自体に価値を認めている。デューイにおける「経験」とは、個人の所有物ではなく集団の所有物であり、構成員すべての成長を（いつもとは限らないが）促進し、日々の生活で私たちが直面する真の問題の解決に役立つものなのである。著者はデューイの哲学を継承する立場から、哲学のなすべきことは、普遍的存在者についての知識（つまりは完全な真理）というみせかけを与えることではなく、何かをなすための指針——それは必ずしも正しいとは限らない——を与えることである、と主張する。

第三章 "Fear of Uncertainty and the Flight from Experience" では、二十世紀後半における経験の衰退とそれに結びつく不確実性への恐怖とをとりあげている。デカルト哲学に顕著なように、近代の哲学は心と身体を区別し身体を機械とみなさざるをえなくなった。その結果、経験への信頼は損なわれることとなり、現代社会では労働者が自分の役割を果たす「情報処理手続き」のための乗り物になっている、と著者はみなすのである。

第四章 "The Degradation of Experience in the Modern Workplace" では、第三章での議論を延長して、現代の企業においては経済効率が過度に重視されるあまり、労働は単純化され、分業もますます促進されることとなり、日々の経験から自律性が奪われる結果となったと主張する。著者はテクノロジー (technology) のかわりに技術 (technics) の復権を説き、豊かな経験を取り戻す必要を主張するのである。

第五章 "Sharing Experience" では、一次的経験と二次的経験を相互補完的なものとして共に重視するギブソンの生態心理学的アプローチを検討している。さらに発達心理学の知見やデューイの「経験」概念を採用して、知覚とは、外的データを入力として取り込むことではなく、環境と切り結ぶ (encounter) ことによって、全体としての人 (a whole person) が達成することである、と主張する。

本章の後半部では、テレビやその技法であるモンタージュによって、家庭生活や娯楽の領域でも一次的経験が二次的経験によって侵食されていると警告している。

第六章 "Experience and Love of Life" では、第五章の最後で提起された「どのようにして人々は、他人と経験を共有するやり方を学習するように動機づけられるのか」という問いに、フロイトなどに言及しながら答えている。従来、動機は肯定的感情によって引き起こされる主観的状態であるという議論がなされてきた。著者によ

れば、フロイトはこのような議論を正当にも批判したものの自身で解決することはできなかった。なぜなら、フロイトは幼児期における直接経験を偏重しエロスを性だけに関連づけてしまったからである。著者はフロイトの汎性欲主義を越えるエロスのあり方を説いている。

第七章“Experience and the Birth of Hope”で、著者は社会心理に起因する病気の多くには一次的経験への蔑視という共通の源があると指摘し、社会心理的疾病の克服のために「希望」という理念を提唱している。ここで再度生態心理学的見地の重要性が強調されることになる。私たちの最も重要な生態心理学的能力のひとつは、自分の経験を未来へと延長する（予期的な）能力である。なぜならば、そのような能力は移動するといった一次的経験と結びついているだけでなく、経験を共有したいという動機によって、しばしば二次的経験とも結びついているからである。

著者によれば、「希望」とは公的経験と公的行動のひとつのアスペクトであり、希望を生きることは個人が行為者として自分の成功と能力の両方を知覚し目標への道筋が開かれていることの実現を要求するものなのである。

Ⅲ

著者が本書で述べたかったことを次のようにまとめることができるだろう。生きがいのある生活をなすほとんどすべてのものが、「経験」に始まり、「経験」と共に成長する。それにもかかわらず、現代生活においては、「経験」、特に一次的経験がないがしろにされてしまっている。確かに、「経験」は多様ではあるが、それは他人との障壁をつくる言い訳として使用されるべきものではなく、逆に他人と共同生活を送るための魂とでもいうべきものなのである。芸術でさえ、日常経験と密接な関係がある。

このような「経験」を強調する著者の主張は、基本的には賛同できるものの、多分に議論の余地のある主張である。その中でも特に重要であると思われるものを三点ほどとりあげることにする。

第一の問題点は、「経験」を一次的経験と二次的経験とに区別することの是非である。その区別はひととおりの意味では有用であると思われるものの、第五章である程度説明された以外は自明のことのように扱われている。この点についてギブソニアンにも批判者が多いことからもわかるように、区別の確立について生態心理学的観点からのより詳しい説明なり議論なりが必要ではないだろうか。

第二の問題点は、第一の問題点とも関わりがあるのだが、テレコミュニケーション（テレビやラジオ、現在ではインターネット、携帯電話など）に対する批判が過度ではないかという疑念である。なるほど、二次的経験が重視されすぎている点は否めないものの、テレコミュニケーションの発達による様々な分野への影響――よきにつけ悪しきにつけ――は計り知れないものがある。少なくとも、現代社会がテレコミュニケーションなしには存続できないのは確かではないだろうか。

第三の問題点は、フロイト理論を著者は自分の関心に引きつけ過ぎているのではないかという問題である。確かに、フロイトのアメリカへの紹介者であるE・B・ホルトなどへの言及が注においてなされてはいるものの、著者の主張を認めるためにはフロイト理論に関する議論が不十分だと思われる。

また、本書だけでなく三部作全体を通じていえることだが、著者の思索の根底を流れる二つの流れ（生態心理学と進化論）のうち、進化論への言及があまりにも少なすぎるといわざるをえない。リード的生態心理学におけるアフォーダンスとは種や個体にとってのものでなく、有機体の個体群（population）にとって利用可能なものである。しかしこの個体群という概念は、進化論者の間でも様々な立場があるにも関わらず、自明なものとして用いられている。特に本書における著者は、デューイの「経験」概念を個体にとってのものではなく、個体群にとってのものとして解釈していると思われるが、個体群という言葉を用いてすらいない。

この他にも多々問題点はあるもののその問題点の多くは三つ（＋一）の問題点同様に、議論の精緻さが欠けているために生じているものである。ただ、本書は一八八ページほどの本であり、著者がこの本を執筆した年齢を考えるならば、本書は、本格的な理論の展開よりもむしろ問題提起のための本であるとみなすこともできるかもしれない。

しかし、本書が、従来現象学と結びつけられることの多かった生態心理学という考え方を、ウィリアム・ジェームズの弟子でありギブソンの教師でもあったホルトなどを経由させながら、プラグマティズムの哲学、特にデューイの哲学と結びつけた点、生態心理学を教育や社会学、さらには倫理などへ応用することの可能性を示唆している点などはそれらの欠点をおぎなって余りあるほどのものである。

本書は現代社会に対するリード的生態心理学からの問題提起の書である。そして、不幸にして四十二歳という若さでなくなった著者の後を受け、これらの問題点の一つ一つを精緻に検討し展開していくことは意義ある作業なのではないかと思う。

注

（1）『直接知覚論の根拠』（抄訳）（境敦史・河野哲也訳）、勁草書房、二〇〇四年。

（2）『アフォーダンスの心理学』（細田直哉訳・佐々木正人監修）、新曜社、二〇〇〇年。

（3）『魂から心へ』（村田純一・染谷昌義・鈴木貴之訳）、青土社、二〇〇〇年。

（4）ここには、著者がギブソンと並んで尊敬していた進化論者M・ギースリンの影響が強く見られる。（E・S・リード、「ダーウィン進化論の哲学」『アフォーダンスの構想』（佐々木正人・三嶋博之編訳）、東京大学出版会、二〇〇一年、所収、を参照のこと。）